

カツラ

かくばかり あふひの稀に なる人を
いかかつらしと 思はざるべき

これは『古今和歌集』(詠み人知らず)の歌である。「これほど逢う日が少なくなってしまった人を、どうして薄情だと思わずにいられようか」と嘆いている。この歌には京都賀茂祭(葵祭)で用いる飾りのアオイ(あふひ)とカツラ(いかかつらし)が掛詞として読み込んである。

賀茂祭の起源は通説では欽明天皇の時代と言われている。暴風雨の害が出たので占うと、賀茂神の崇りだと判明したので、4月吉日を選びこの神をお祭りすると五穀豊饒になった。このことに由来するという。しかし『三笠紀』(『秀真伝』の補完文献)によると、遙かに古い歴史がある。豊受大神(『秀真伝』では天照大神の母方の祖父神)が年中行事を説く中で、4月の行事を次のように語る。「四月は太陰の陽お招く 早苗青みて 夏お告ぐ 中綿脱ぎて 月末は 葵桂の 女男祀り」と。旧暦4月末の葵桂のお祭りは、男女に因んだ祭りだというのである。『秀真伝』にはこんな故事もある。琵琶湖東岸の瑞穂の宮で政を行っていた瓊々杵尊は、皇位継承を図るために、九州を治めていたお子の彦火々出見尊を瑞穂に呼び戻した。妻の豊玉姫は臨月が近いので、先に都に着いた彦火々出見尊は気比の海岸に産屋の造営を命じておく。ところが後から出立した姫の鴨船(鴨の泳ぎからヒントを得て姫のご先祖が考案された船)は途中で難破するのである。身重の身でありながら、胎児を守ろうと必死に近くの海岸に泳ぎ着き、再び船で気比までたどり着いた。産屋はまだ茅葺きの屋根が仕上がっていなかったが、そこで男子を出産したのである。そのお子はこの故事に因んで鶴草葺不合尊と名付けられた。また諱は鴨仁という。ここで椿事が発生する。彦火々出見尊は産屋で裸のまま横になっていた豊玉姫を覗いてしまうのである。先に裸同然で泳ぎ着いたことも含め、これらを恥じた姫は罔象女の宮(現・貴船神社)に籠もってしまう。皇位継承の大嘗祭にも出席しない。そこで義父である瓊々杵尊が説得に向かった。それらは恥ではなく天地の道に適ったことだ、ただ人の道をまだ悟っていないと、桂と葵の葉を見せながら、男女のあり方を説くのであった。これでようやく姫は納得し、都に戻ったのである。桂も葵も、その葉はハート型をしている。古代日本でも男女の愛の象徴としてハートマークが用いられていたとは驚きであり、恐らく古今東西共通の深層心理があるのだろう。桂はカツラと訓読されているが、実は「桂」には同名異種の三種類の植物がある。一つはモクセイ科の木犀である。中国では桂といえば銀木犀を指すことが多く、桂花は木犀の花、桂林は木犀の林のことである。一つは漢方でおなじみのクスノキ科の肉桂である。なお月桂樹もクスノキ科である。そしてもう一つが先に述べたカツラ科のカツラである。日本各地で自生する落葉高木である。カツラの祖先種は遙か白亜紀まで遡り、各地で化石が出土している。葵祭では神人はこの桂と葵を冠に挿す。古来、草木を髪に挿頭したものを鬘と称した。それは役者が被る鬘に通じている。ややこしいことに、『万葉集』のカツラの多くは「楓」の漢字を当てている。さらに葛城や葛木の「葛」もカツラと発音するが、「葛」は元は蔓草の総称を意味していた。従って葛城(葛木)は正しくは桂木だったに違いない。

カツラの語源は「香出」であろうと(『大言海』)言われているように、この落葉には甘い芳香がある。秋、登山したときの懐かしい香りの一つである。肉桂のきつい香りとは違う。地方によってはカツラをコウノキ(香の木)、カツノキ(香出の木)、マッコウノキ(抹香の木)などと呼ぶ。実際東北地方では、この葉を粉にして抹香を作っている所もある。最近ではカツラの香水も現れた。香りでも勝負するある種の疾患には効きそうである。近年異性に興味を示さない若者が増えたと聞く。IT機器の電磁波ばかりでなく、時には山に分け入って、太古からのカツラのフィトンチッドを全身で浴びてもらいたい。男女のご縁に恵まれるかもしれない。(山人)

